

2021年度(令和3年度)学校評価自己評価表

広瀬中学校区	校番	福山市立広瀬中学校
最終更新日	2022年(令和4年)2月28日	

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容 学校の取組みや成果を分かりやすく示すことで、改善のための有効な意見を聞くことができた。 また、少人数小規模校のため、児童生徒個々の姿容から、成果を確認すると共に、これまで以上に地域・保護者と連携した取組みが大切である。	児童生徒の現状 元々中学校区に在住する児童生徒は「0」となり、学校に隣接する児童養護施設から通学する児童生徒や、他の校区から通学する児童生徒が増加している。	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等	「基礎的な知識・技能」「学びに向かう力」「社会性」「コミュニケーション能力」 ・挑戦・命と健康を大切にできる心を持ち、粘り強くやり抜く子ども ・共高・様々な考えを理解し、個性や違いを尊重し合い、共に高め合える子ども ・創造・知識や経験を基に考え、新たな学びを創造する子ども 小中合同行事を効果的に仕組み、異年齢交流や大人数での活動を行い、児童生徒の「やればできる」「やってよかった」と感じる体験を積み重ね、自己肯定感を高める。
---	---	---	---

III 自校

<p>ミッション</p> <p>1 不登校になり、在籍校への登校は困難であるが、新しい学校で学び直しができる環境を整備し、自信を取り戻し、高校進学を見据えた学力の定着、学習意欲の向上を図る。</p> <p>2 集団への適応が難しい子どもに対し、その状況に応じて、安心して学べる環境を整備することで、穏やかに教員や友達との人間関係を築きながら、社会性やコミュニケーション能力を育む。</p>	<p>育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)</p> <p>「基礎的な知識・技能」</p> <p>「学びに向かう力」</p> <p>「社会性」</p> <p>「コミュニケーション能力」</p>
<p>学校教育目標</p> <p>自ら学び 心豊かで たくましく生きる生徒を育てよう</p>	<p>めざす子ども像</p> <p>中期</p> <p>後期</p>
<p>現状</p> <p><児童生徒></p> <p>小学校時に不登校傾向や大人数の集団に馴染めなかったりした生徒や、小規模・少人数な環境を選び校区外から登校する生徒が多い。そのため、学力が定着していなく、生活習慣も確立できていない、自己肯定感が低い生徒の割合が高い。</p> <p><授業></p> <p>基礎的・基本的な学習内容を確実に定着させるために、具体物を使ったり、個に応じた指導に取り組んだりしている。生徒が主体的に学ぶ授業については、ブロック研修で学んだことを自校で取り組み、授業改善等を行っている。</p>	<p>一人一人の学びの促進 ～ 個に応じた多様な学びを通して ～</p> <p>研究</p> <p>テーマ</p> <p>内容等</p> <p>○生徒の言葉で問いを創る授業を行うことによる主体的・対話的で深い学びの推進 ○ICTの活用を通して学習履歴等を用いたきめ細かい指導・支援による個別最適な学びの推進 ○生徒どうしの学び合いによる協働的で主体的な学びの推進</p> <p>めざす授業の姿</p> <p>○「なぜ、どうして?」「教えて!」「わかった、できた!」「もっとやりたい!」などの声のする授業 ○個の課題に合わせた支援が適切に行われ、誰もが分かる授業 ○ICTの活用により、生徒自らが学習状況を把握し、主体的に学習を調整することができる授業</p>

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立広瀬中学校

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る取組状況	70%以上達成評価	改善方策	□指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	70%以上達成評価	総合評価	改善方策		
3	生徒が主体的、対話的に学び、個々の生徒の学力を確実に定着・向上させる。	★	継続	①思考力・表現力を育成する。	○自己選択・決定を位置付けて「考えることは面白い」と実感できる学習方法や学習形態等を工夫する。	○「授業がよくわかる」「授業で考えることは面白い」生徒肯定的評価80%以上	□生徒アンケート結果から肯定的評価は、「授業がよくわかる」88.8%「授業で考えることは面白い」63.3%であった。	3	2	○今後もわかる授業を工夫し、授業の中で生徒に自己選択・決定をする場面に授業に取り入れ、生徒の肯定的評価を80%以上とする。	□生徒アンケート結果から肯定的評価は、「授業がよくわかる」93.2%「授業で考えることは面白い」60.7%であった。 ◎教職員も思考力・表現力を育成するための授業改善を図っているが目標とする結果には至っていない。	3	2	3	○一斉研修等で個々の教員が学んだことをもとに、今後も思考力・表現力を育成する授業に取り組み、わかる授業を工夫していく。あわせて、教職員・生徒アンケート等で見取っていく。
2	生徒の自己指導能力(主体性・積極性)を向上させる。	★	継続	②生徒に達成感を持たせ、自信を高めさせる。	○生徒が自ら考え、挑戦し続けるよう、がんばりを認め合う具体策を各自が設定し取り組ませる。	○「自分の考えは認められている」生徒肯定的評価80%以上	□「自分の考えは認められている」生徒肯定的評価63%であった。	2	2	○全教職員で個々の生徒の良さや頑張りを通し、生徒への肯定的評価を様々な場面でを行い、生徒の肯定的評価を80%以上とする。	□「自分の考えは認められている」生徒肯定的評価64%であった。 ◎今年度の様々な行事は、生徒の主体性・積極性を視点にして取組を行った。事後アンケートから「行事をやったよかった」と達成感・充実感を持った生徒は約80%であった。	3	2	2	○全教職員で全校生徒の個別の指導計画をもとに交流を行った。個々の生徒に対してどのように支援していくか全教職員で共有した。そして、生徒の良さや頑張りや様々な場面や通信等で、生徒に伝えるように発信する。
4	地域・保護者から信頼される学校教育を推進する。	★	継続	③地域、保護者へ積極的に学校情報を発信する。	○様々な機会を通して地域・保護者との情報発信(各種便り・HP等)を積極的に行う。	○保護者学校満足度85%以上	□「積極的に学校情報を発信している」と回答した保護者の学校満足度は83.3%であった。また、「学校による保護者連携は良いと思う」肯定的回答95.8%であった。	3	3	○今後も様々な機会を通して保護者との連携を積極的に行い、保護者肯定的評価を85%以上とする。	□「積極的に学校情報を発信している」と回答した保護者の学校満足度は89.4%であった。また、「学校による保護者連携は良いと思う」肯定的回答89.4%であった。	3	4	3	○今後も様々な機会を通して保護者との連携を積極的に行うよう取り組んでいく。また、今以上に地域や保護者から信頼されるために、丁寧できめ細かい対応を推進していく。
2	働き方改革の意義を理解し、自ら実践することができる。	★	継続	④業務内容を精選しながら質を高め、年間を通して計画的に業務を遂行する力を付ける。	○定時退校日を厳守するとともに、見通しをもった業務管理を進める。	○時間外勤務時間、月45時間を超える職員ゼロ	□時間外勤務時間、月45時間を超える職員ゼロは達成できなかった。 時間外勤務時間、月45時間を超える職員数 4月：1人 5月：0人 6月：2人 7月：2人 8月：0人	2	2	○定時退校日を月間行事予定表および職員室ホワイトボードに記載し相互に意識を持たせ、時間外勤務時間、月45時間を超える職員ゼロを目指す。	□時間外勤務時間、月45時間を超える職員ゼロは達成できなかった。 時間外勤務時間、月45時間を超える職員数 9月：0人 10月：0人 11月：3人 12月：0人 1月：0人 2月：0人	3	3	3	○時間外勤務時間を超えているのは若手教職員であるため、計画的に業務を遂行する力を付けるための人材育成を推進していく。また、毎日の時間外業務の「見える化」を図り意識させる。

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。